

幼児のロールシャッハ反応 (I)

大 西 俊 江

Toshie ONISHI : Rorschach Responses of Infants, Part, I

はじめに

人格診断の一つの手がかりとして、Hermann Rorschach によって、ロールシャッハ・テストが創案されてから、ちょうど半世紀になる。現在までに、ロールシャッハ・アプローチは、さまざまな方面から数多くなされてきている。特に、このロールシャッハ・テストは、成人の、そして精神障害者の人格特性を知る手段として、広く臨床場面で普及してきた。ロールシャッハ反応は、刺激としてのインク・プロットに対して、被検者が、いろいろな経験や動機・欲求などを通して知覚した image が言語化されることによって、反応としてあらわれる。そして、このような行動に被検者の personality があらわれると考えられている。10枚の「インクのみ」に対する反応特徴に投射された performance はあくまでも、ロールシャッハ・テストを窓としてのぞかれた personality の一面であるにすぎない。しかし、このロールシャッハ・テストにおける反応は、もちろん個人独特のプロトコルではあるが、年齢、環境、知能、精神機能等々の要因によって、各集団の特徴をも、かなり明確に知ることができることは、周知のことである。

近年、児童臨床の発展にともなって、ロールシャッハ・テストを児童に適用する機会が一層増えてきている。

子どものロールシャッハ反応に関して、Meyer, G. と Thompson, J¹⁰⁾ は、7才児までを対象とした従来の研究が、きわめて限定された (IQ とか Socio-Economic Status がともに高い) 被検者のみを取り扱い、また、統計的処理も不十分であるとし、幼稚園児のロールシャッハ・テスト成績を取りあげ、より normative な研究を試みている。

Thetford, W.¹³⁾ らは、6才から17才にわたる普通児を対象に、personality 構造の発達の様相をロールシャッハ・テストからみようとしている。

わが国では、辻悟ら¹⁵⁾が、大阪市の小学生を被検者として、児童のロールシャッハ反応の規準をうちたて、かなり詳細に検討している。

また井上和子⁴⁾は、児童のロールシャッハ反応の特徴とされる「反応単位のあいまいさ」を取りあげ、この現象が、どのような心理学的機能に基づいているかを、4才～9才児を対象に発達学的に分析・検討している。

板谷美代子⁶⁾は、同じように幼児のあいまい反応について、形式的な特徴から質的評価を行って記号化を試みている。

以上、国内外における幼児・児童を対象としたロールシャッハ・テストに関する研究を若干とりあげたが、これらは、大体、次の3つの方向に分けることができると井上は述べている。即ち、(1)サインに関する年齢規準を目指すもの。(2)ロールシャッハ反応以外の行動の何らかの面との間に関係を求めるもの。(3)ロールシャッハ行動に示される児童の特徴を発達学的に考察するものなどである。

ロールシャッハ法が発展するには、形式分析のみでは紋切型な人間理解しかできないであろうし、また内容分析だけを重視するとすれば、これまたロールシャッハ本来の強味を失うことになる。従って、これらすべてを包含するような多面的なアプローチが必要であると考えられる。特に、子どもの反応を解釈する場合、発達段階に即した知覚特徴をまずとらえなければならない。しかし、ここで形式分析のみにとどまってその水準を云々するだけであるとするれば、「この子どもは、年齢に相応した知覚的発達をとげている」とか「年齢のわりには未成熟である」とかの表面的な結論しか出し得ない。これに加えて、反応内容とか、表出言語、情緒的表現、反応態度などをもあわせて、分析していくことが重要である。

このような観点から、筆者は、幼児ならびに児童のロールシャッハ反応特徴を、エイジ・ノルムの確立をめざし、発達の、かつ質的にとらえようと試みるものである。

特に本稿は、その第一段階として、幼児のロールシャッハ・インクプロットに対する反応数、反応拒否及び把握様式<Location>に関して、5才児と6才児に分けて、比較検討することを目的とする。

方 法

被検者

平田市平田幼稚園児5才児20名。6才児42名。計62名。これを、a群(5.0~5.11)、b群(6.0~6.5)、c群(6.6~6.11)の3群に分けた。

検査期間

1972年3月~7月。

検査方法

テストは、片口法⁸⁾に準拠して、同幼稚園内の一室で、個別に実施した。ただし、幼児であるため、Inquiryはカードごとに行った。テスト及び結果の整理はすべて、筆者が行った。

分析方法

子どものロールシャッハ反応は、記号化する際に、それが一個の単位をもった反応であるかどうか、つまり、独立した反応か、単なる特殊化か、あるいは感想かといった点で、かなり困難をきたすものである。

筆者は、独立した1個の反応としてとりあつかえるのは、Inquiry において、解答が得られ、記号化ができるものと限定して、整理した。

また、把握様式に関しては、次のような見解で分類を行なった。

成人においても、反応領域、特にWはその質を考慮しなければならないが、幼児、児童の場合には、特にそのアプローチが必要である。ところで、把握様式と形態質の問題が、初めて体系的に明らかにされたのは、Friedman, H³⁾らによってである。彼らは、Werner による「未分化から分化、統合へ」の発達理論にもとづいて、分裂病者の知覚的退行の問題などを含めて組織的な研究を行なった。彼らのカテゴリーは以下のようにまとめられる。〔各記号の訳ないし邦語命名は片口(1960)によるものである。〕

Wa (無定形全体反応: amorphous W)

プロットの形態が何ら決定的な役割を果たしていない反応で、プロットの色彩のみにもとづいている。例カードI「黒い絵具」

Wv (漠然全体反応: vague W)

プロットの漠然とした印象にもとづいており形態要素はいくぶん存在するが、どのような形態でも成立しうるような性質をもつもの。

例 カードII「岩層」

W- (不良形態全体反応)

反応内容は一定の形を必要とするが、プロットの形にしか沿わないもの。例カードIV「ひとで」カードI「かえる」

DW (作話的全体反応)

プロットの一部をもとにして、プロットの形態と反応内容の形態との類似性を無視して、全体に反応してしまうもの。例カードIV中央下部の「へさき」の部分のみにもとづいて「ボート」

Wm (平凡全体反応: mediocre W)

プロットの輪郭と分節が考慮にいれられ、一定の形態がプロットと一致している。例カードV「こうもり」、カードI「お面」

W+ (結合的良形態全体反応)

個々の部分が結合されて、全体を形成し、内容とプロットの一貫度が高い反応。例カードII「2人の男が酒場で乾杯している」。カードVIII「帆船」

W# (分節的良形態全体反応)

個々の部分が知覚的に結合され、しかもよく分化された統一的全体へと再構成され、内容とプロットが一致している反応。例 カードV「ギリギリスの衣裳をつけ、スケートをはいた男。ショーのフィナーレで、二人の少女が彼の腕の下に憩っている。」

Da 例 カードII 上部赤色領域「火」

Dv 例 カードX 青色領域「水…水しぶき」。

D⁺ 例 カードVIII ピンク領域「蜂」

Dd D 例 カードII 黒色領域半分「象のよう」(外側の輪郭を「頭」と見たことにのみとづいて)。

Dm 例 カードIII 中央赤色領域「蝶ネクタイ」。

D⁺ 例 カードIII 黒色領域「二人の男が部族の踊りの太鼓を叩いている」。

D⁺ 例 カードXI オレンジ色領域「帽子をかぶった男がラッパを吹いている」。

Friedman のカテゴリーは、把握様式の発達の変化をかなり明確にとらえるという点で、評価されている。筆者は、このカテゴリーにほぼ倣い、彼のカテゴリーにSとその他の結合反応(例, S, d)の2つを加えて、幼児のプロット・ロケーションのとらえ方を検討する。

結果と考察

1) 反応数 R

各群の反応総数, 平均値, 標準偏差および Range は表 1-1, 分散分析は表 1-2 に示すとおりである。

表 1-1 各群の反応数 (R)

Group Sex	N	ΣR	\bar{X}	SD	Range	
a	♂	12	264	22.0	10.763	10-43
	♀	8	126	15.8	7.579	0-28
		20	390	19.5	10.092	
b	♂	14	187	13.4	8.885	0-29
	♀	9	123	13.7	4.497	5-21
		23	310	13.5	7.483	
c	♂	10	150	15.0	12.434	5-51
	♀	9	85	9.4	4.086	3-16
		19	235	12.4	9.874	

表 1-2 反応数 (R) の分散分析

変 動 因	SS	df	MS	F
1. 性 別	46.762	1	46.762	17.428**
2. 年 令 群	70.018	2	35.009	13.047**
3. 交 互 作 用	24.099	2	12.049	4.491*
4. 誤 差	150.258	56	2.683	

* $P < .05$

** $P < .01$

これによると, Rは, a群, b群, c群の順に減少してきている。これは, 分散分析の結果有意差がみられた。また, 男女間にも有意差があり, 男児の方が, 女児より反応が多いと言え

る。一般に、Rは生産性を反映する因子とされるが、精神活動が年齢とともに活発になり、生産性も高まっていくことから、年齢があがるにつれて、当然Rは多くなると予想される。それが本被検者においては、逆の結果となっている。これはどういうことを意味するのであろうか。

Ames¹¹⁾らの報告では、4才14.7、5才13.9、6才15.8となつて、5才でRが減少している。

このような一時期減ずる波があるとすれば、本被験者のa群19.5、b群13.5、c群12.4というRの平均値は、6才児にその波があらわれたと考えられないだろうか。これは、個人の反応の仕方、プロトコルを概観して言えることであるが、5才児に比較して、6才児の方が、より慎重で、ていねいな反応態度を示した。また、プロットと反応を結びつけようとの明細化への努力がみられるのは、6才児であり、5才児の場合、即座に、直観的な反応を連続して出すという傾向がみられた。

このことに関しては、Rのみでは十分な意味づけができないので、後の把握様式とあわせて考察していきたい。

また、男女差は、Rangeにも示されているように、男児の方が特に個人差が大きく、女児にくらべて、男児が想像性も創造性も生産性もともに豊かであることを示していると思われる。

本被検者のRは、Amesらの被検児より、5才児ではかなり多いが、6才児ではやや少ない。辻ら阪大の報告によると、5才児22.3、6才児28.9でいずれも多い。辻らは、大阪市内の子どもが対象であり、地域、民族のちがいが出ていると言えるのではないだろうか。

一方、カードごとにRをみたのが表2-1である。各カードの分散分析は、表2-2に示されるとおりである。

これによると、カードI、IV、Vには、年齢間、性間に差がみられないが、残りのカードは、いずれか、またはいずれにも有意な差がみられる。

上記3枚のカードに差がなかったことについて、カードの特徴と関係づけて、少し考えてみよう。

被検者は、初めての経験として、奇妙で、あいまいな刺激であるカードIを見せられて、いったいどんな風に答えたらいいのか、とまどいを感じるかもしれないし、あるいは、不安と当惑を感じるのかもしれない。このとまどいとか不安は、年齢や性に関係なく生じるものといえるだろう。また、カードIVは、カードいつばいにひろがった重い陰影をもった黒色のプロットであり、陰影ショックのもつとも生じやすいカードとされている。しかし、このカードは、幼児にとっては、テレビや本でなじみの怪獣とみられやすい。実際に、このカードに対しては、「仮面ライダーにでてくるショッカー」であるとか、「へにょへにょ怪獣」であるとかの反応がみられる。カードVは、反応しやすいカードで、これも「こうもり」、「チョウ」などの共通した反応がみられる。

表2-1 カード別反応数

カード		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
a	♂	ΣR	19	26	30	23	20	22	24	26	29	45
		\bar{X}	1.583	2.167	2.500	1.917	1.667	1.833	2.000	2.167	2.417	3.750
		SD	0.954	1.213	1.803	1.187	1.179	0.898	1.080	1.280	1.256	2.832
	♀	ΣR	11	9	17	11	10	10	13	11	9	25
		\bar{X}	1.375	1.125	2.125	1.375	1.250	1.250	1.625	1.375	1.125	3.125
		SD	0.857	1.166	1.452	0.857	0.829	0.661	0.857	0.857	0.599	2.666
		ΣR	30	35	47	34	30	32	37	37	38	70
		\bar{X}	1.500	1.750	2.350	1.700	1.500	1.600	1.850	1.850	1.900	3.500
		SD	0.922	1.299	1.682	1.100	1.072	0.860	1.014	1.195	1.221	2.784
b	♂	ΣR	25	17	20	13	18	19	13	19	18	28
		\bar{X}	1.786	1.214	1.429	0.929	1.286	1.143	0.929	1.357	1.286	2.000
		SD	1.372	0.773	0.979	1.033	1.097	0.742	1.033	1.172	1.097	1.813
	♀	ΣR	9	10	15	9	12	12	11	14	12	19
		\bar{X}	1.000	1.111	1.667	1.000	1.333	1.333	1.222	1.556	1.333	2.111
		SD	0.816	0.567	0.943	0.471	0.471	0.667	0.916	0.831	1.054	1.595
		ΣR	34	27	35	22	30	28	24	33	30	47
		\bar{X}	1.478	1.174	1.522	0.957	1.304	1.217	1.043	1.435	1.304	2.043
		SD	1.247	0.701	0.972	0.859	0.906	0.720	0.999	1.056	1.081	1.732
c	♂	ΣR	15	16	17	13	17	13	10	17	12	20
		\bar{X}	1.500	1.600	1.700	1.300	1.700	1.300	1.000	1.700	1.200	2.000
		SD	1.204	1.855	1.187	1.005	1.187	1.345	0.775	1.269	1.077	2.757
	♀	ΣR	9	6	8	10	10	6	11	10	5	10
		\bar{X}	1.000	0.667	0.889	1.111	1.111	0.667	1.222	1.111	0.556	1.111
		SD	0.816	0.667	0.737	0.737	0.567	0.471	0.629	0.567	0.497	1.197
		ΣR	24	22	25	23	27	19	21	27	17	30
		\bar{X}	1.263	1.158	1.316	1.211	1.421	1.000	1.105	1.421	0.895	1.579
		SD	1.068	1.496	1.079	0.893	0.990	1.076	0.718	1.042	0.912	2.208

表2-2 カード別反応数の分散分析

Card I					Card VI				
変動因	SS	df	MS	F	変動因	SS	df	MS	F
1. 性別	0.428	1	0.428	4.004*	1. 性別	0.237	1	0.237	6.659**
2. 年令群	0.037	2	0.019	0.174	2. 年令群	0.766	2	0.383	10.739**
3. 交互作用	0.380	2	0.190	1.775	3. 交互作用	0.161	2	0.080	2.251
4. 誤差	5.993	56	0.107		4. 誤差	1.997	56	0.035	

Card II					Card VII				
変動因	SS	df	MS	F	変動因	SS	df	MS	F
1. 性別	0.352	1	0.352	4.927*	1. 性別	0.341	1	0.341	5.365**
2. 年令群	0.822	2	0.411	5.750**	2. 年令群	0.487	2	0.239	3.762*
3. 交互作用	1.010	2	0.505	7.062**	3. 交互作用	0.557	2	0.279	4.383**
4. 誤差	4.004	56	0.071		4. 誤差	3.561	56	0.063	

Card III					Card VIII				
変動因	SS	df	MS	F	変動因	SS	df	MS	F
1. 性別	0.922	1	0.922	10.563**	1. 性別	0.078	1	0.078	1.517
2. 年令群	1.626	2	0.813	9.310**	2. 年令群	0.654	2	0.327	6.332**
3. 交互作用	0.066	2	0.033	0.378	3. 交互作用	0.370	2	0.185	3.578*
4. 誤差	4.889	56	0.087		4. 誤差	2.893	56	0.051	

Card IV					Card IX				
変動因	SS	df	MS	F	変動因	SS	df	MS	F
1. 性別	0.182	1	0.182	2.081	1. 性別	0.837	1	0.837	21.091**
2. 年令群	0.341	2	0.170	1.952	2. 年令群	1.635	2	0.817	20.589**
3. 交互作用	0.549	2	0.274	3.144	3. 交互作用	0.586	2	0.293	7.381**
4. 誤差	4.889	56	0.087		4. 誤差	2.223	56	0.039	

Card V					Card X				
変動因	SS	df	MS	F	変動因	SS	df	MS	F
1. 性別	0.001	1	0.001	0.019	1. 性別	3.695	1	3.695	16.044**
2. 年令群	0.186	2	0.093	1.800	2. 年令群	3.367	2	1.683	7.310**
3. 交互作用	0.285	2	0.033	0.378	3. 交互作用	0.244	2	0.122	0.530
4. 誤差	2.893	56	0.051		4. 誤差	12.895	56	0.230	

以上、3枚のカードは、年齢、性に関係なく、同じような反応傾向を示すといえる。残り7枚のカードは、カードそのものの特徴とは別に年齢、あるいは性によって反応にちがいがあることがわかるであろう。

2) 反応拒否 Rej.

Rej に関しては、表3に示してある。

表3 各群の反応拒否数 (Rej)

Group	Sex	Σ Rej	\bar{X}	SD
a	♂ ♀	1	0.083	0.276
		11	1.375	3.276
		12	0.600	2.177
b	♂ ♀	29	2.071	2.987
		11	1.222	1.681
		40	1.739	2.574
c	♂ ♀	13	1.300	1.735
		25	2.778	2.439
		38	2.000	2.224

Rej は、Rと関連するものであるから、当然先のRの傾向とは逆に、a, b, c群の順に Rej は多くなっている。しかし、これは、分散分析によって、いずれにも差は認められなかった。

Rej は、6才以下の子どもではしばしばおこりやすいと言われている。しかし、これも、年齢が長ずるにつれて減じていく傾向がある。それが、逆に6才児により多く Rej がみられたということは、Rの減少とあわせて、検査者ないしは、テストそのものへの拒否と考えるならば、「何も見えない」のと「何かに見えていても言わない」との2つの拒否の後者として、Rej の形が強くあらわれたのではないだろうか。これは、反応態度の質的な分析とあわせて検討する必要があるであろう。

次に各群の Rej カードを、Rej の多い順にあげてみると、次のようである。

次に各群の Rej カードを、Rej の多い順にあげてみると、次のようである。

a群 I, II

b群 VII, VI, I, VIII, IX

c群 IX, I, II, VI

全体 I, VII, IX, II, VI (—は同位)

カードIは、3群ともに拒否されるカードとなっている。これは、幼児にとって、新しい場面におかれたことに対する動揺のあらわれとみられ、5, 6才児に共通していえることがわかる。また、全体として、color カードよりも、non-color カードに対して拒否がおこりやすい。これは、幼児が形よりも色彩の方により反応しやすいということとつながるであろう。

3) 把握様式

まず、Location カテゴリーにおいて、各群でどのような傾向がみられるかをみてみよう。

W%, D%, Dm%は、表4に示すとおりである。

これは、プロットを全体としてみたか (W), 部分としてみたか (D, d), あるいはまた、特殊なゲシュタルトしていない部分としてみたか (Dd), 空白部分を見たか (S) によって分

表4 各群のW%, D%, Dm%

Group	Sex	W%	D%	Dm%
a	♂ ♀	34.5	56.8	7.2
		31.0	62.0	4.0
		33.6	58.7	6.2
b	♂ ♀	32.6	64.7	2.7
		47.2	48.8	4.1
		38.4	53.4	2.2
c	♂ ♀	26.7	70.0	3.3
		38.8	57.6	3.5
		31.1	65.5	3.4

げているが、5、6才児における%の値は、ほぼ彼女の資料と一致している。また、D%は、本被検者では、他の報告にくらべて、かなり高く出ている。Dm%に関しては、あまり報告されていないが、上の表からは、a群においても最も高く、b、c群がほぼ同じである。Ddカテゴリーは、dd, dr, de, diの4種の下位カテゴリーを含んでいるが、特にdd, drの出現がめだつた。特に、5才児にその傾向が強く、ごく小さな突起や、先端、点や穴などに目をつけて反応するので、Dm%が高くなっていると思われる。これは、また、この時期の原始的部分知覚が、部分のための部分といった性質をもっており、「牛の鼻がある」、「これはねずみのしっぽだ」とか、「怪獣の耳がみえる」といったような反応態度に示されている。

次に、Locationと形態質をあわせて分類した16の把握様式のカテゴリーについてみてみよう。

表5は、16のカテゴリーについての、各群の反応総数、平均値、標準偏差を示したものである。

各群の把握様式を、Rに対する各カテゴリーの出現数の割合を出し、図示すると、図1のようになる。これによると、3群のパターンは、ほぼ似かよっていることがわかる。このFriedmanのカテゴリーは、発生的に低い反応から、高い反応へとならべられている。即ち、未成熟な全体知覚から、未分化な部分知覚へ、そして、ddやdrが増加し、部分への知覚がより分析的におこなわれるようになり、次第に統合的な知覚へと発達していく過程を示している。

本被検者では、D⁻が最も多くあらわれ、ついでW⁻, Wm, Dmに山がみられる。つまり、未だ未分化な部分知覚が圧倒的に多く、また、未成熟なW⁻も残っているが、プロットの輪郭と分節を考慮にいれた、より統合化された知覚への変化もあらわれはじめています。

そこで、特に、突出しているカテゴリー(W⁻, Wm, D⁻, Dm)をとりあげて、グループ間、男女間の違いをみてみよう。

類され、DdとSとをあわせて、反応に対する割合を出したのがDm%である。

表4によると、W%はb群が最も高くついでa群、c群になっている。また、D%は、a、b群がほとんど同じ%を示しており、c群が両群をうわまわっている。

一般に、W%は、年齢が増すにつれて、低下する傾向にあるが、それはD%より高いということはない。しかし、小沢は、W¹¹⁾%が年齢にとまって上昇し、13~14才で80.1%も示したと報告している。彼女は、この原因について、サンプルの特殊性をあ

表5 16 カテゴリーにおける

カテゴリー		Wa	Wv	W-	DW	Wm	W+	W++	Da	
a	♂	ΣR	1	6	56	0	25	3	0	12
		\bar{X}	0.083	0.500	4.667	0.000	2.083	0.250	0.000	1.000
		SD	0.276	0.764	2.494	0.000	1.498	0.433	0.000	1.291
	♀	ΣR	1	3	19	3	14	0	0	5
		\bar{X}	0.125	0.375	2.375	0.375	1.750	0.000	0.000	0.625
		SD	0.331	0.484	2.497	0.484	1.561	0.000	0.000	0.696
		ΣR	2	9	75	3	39	3	0	17
		\bar{X}	0.100	0.450	3.750	0.150	1.950	0.150	0.000	0.850
		SD	0.300	0.669	2.736	0.357	1.532	0.357	0.000	1.108
b	♂	ΣR	3	5	29	4	17	3	0	8
		\bar{X}	0.214	0.357	2.071	0.286	1.214	0.214	0.000	0.571
		SD	0.410	1.042	2.313	0.452	0.773	0.410	0.000	0.904
	♀	ΣR	3	8	26	2	17	2	0	8
		\bar{X}	0.333	0.889	2.889	0.222	1.889	0.222	0.000	0.889
		SD	0.471	1.286	2.726	0.416	0.567	0.416	0.000	0.100
		ΣR	6	13	55	6	34	5	0	16
		\bar{X}	0.261	0.565	2.391	0.261	1.478	0.217	0.000	0.696
		SD	0.439	1.173	2.515	0.439	0.773	0.412	0.000	0.997
c	♂	ΣR	0	6	7	4	21	2	0	5
		\bar{X}	0.000	0.600	0.700	0.400	2.100	0.200	0.000	0.500
		SD	0.000	0.663	0.781	0.490	1.921	0.600	0.000	1.500
	♀	ΣR	1	1	13	1	16	1	0	3
		\bar{X}	0.111	0.111	1.444	0.111	1.778	0.111	0.000	0.333
		SD	0.314	0.314	1.165	0.314	1.872	0.314	0.000	0.471
		ΣR	1	7	20	5	37	3	0	8
		\bar{X}	0.053	0.368	1.053	0.263	1.947	0.158	0.000	0.421
		SD	0.223	0.581	1.050	0.440	1.905	0.488	0.000	1.139

各群の反応数

Dv	D-	DD	Dm	D+	D++	S	その他
25	89	16	24	0	0	3	4
2.083	7.333	1.333	2.000	0.000	0.000	0.250	0.333
2.783	6.786	1.546	1.472	0.000	0.000	0.433	0.624
7	46	5	18	3	0	0	2
0.875	5.750	0.625	2.250	0.375	0.000	0.000	0.250
1.269	4.294	1.317	1.854	0.484	0.000	0.000	0.433
32	135	21	42	3	0	3	6
1.600	6.700	1.050	2.100	0.150	0.000	0.150	0.300
2.375	5.967	1.499	1.640	0.357	0.000	0.357	0.557
5	69	4	37	2	0	1	0
0.357	4.929	0.286	2.643	0.143	0.000	0.071	0.000
0.718	4.682	0.589	2.844	0.350	0.000	0.258	0.000
7	30	3	15	0	0	2	0
0.778	3.333	0.333	1.667	0.000	0.000	0.222	0.000
1.030	2.494	0.471	1.491	0.000	0.000	0.629	0.000
12	99	7	52	2	0	3	0
0.522	4.304	0.304	2.261	0.087	0.000	0.130	0.000
0.878	4.048	0.547	2.453	0.282	0.000	0.448	0.000
8	49	4	39	3	1	1	0
0.800	4.900	0.400	3.900	0.300	0.100	0.100	0.000
1.470	7.503	0.663	3.145	0.458	0.300	0.300	0.000
2	26	2	14	4	0	1	0
0.222	2.889	0.222	1.556	0.444	0.000	0.111	0.000
0.416	2.079	0.629	1.165	0.497	0.000	0.314	0.000
10	75	6	53	7	1	2	0
0.526	3.947	0.316	2.789	0.368	0.053	0.105	0.000
1.141	5.717	0.653	2.687	0.482	0.223	0.307	0.000

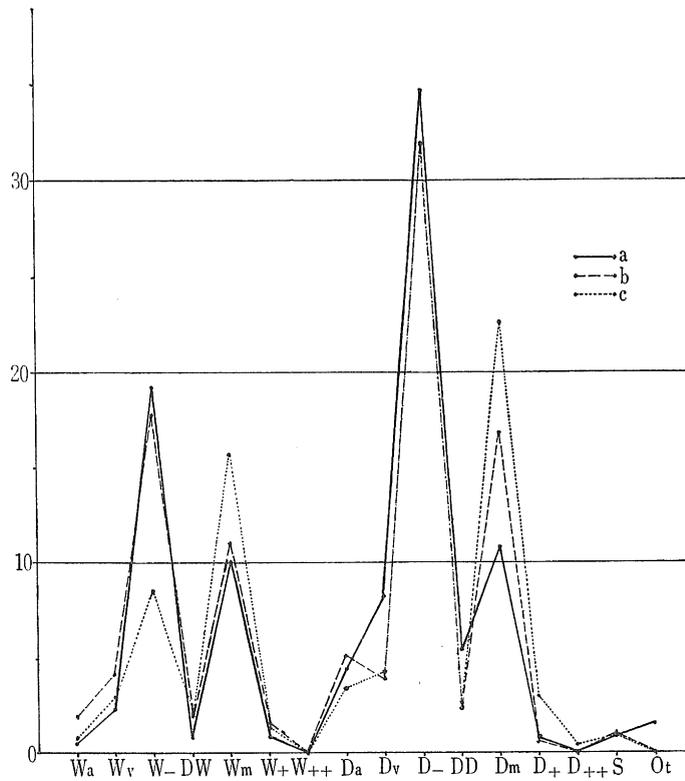


図1 16カテゴリーの出現様相

上記4つのカテゴリーについて、それぞれ分散分析をおこなった結果を表6に示した。

表6 4カテゴリーの分散分析

W-					D-				
変動因	SS	df	MS	F	変動因	SS	df	MS	F
1. 性別	4.609	1	4.609	21.129**	1. 性別	13.143	1	13.143	18.921**
2. 年齢群	10.134	2	5.067	23.230**	2. 年齢群	4.467	2	2.233	3.215*
3. 交互作用	0.674	2	0.337	1.544	3. 交互作用	4.202	2	2.101	3.025
4. 誤差	12.215	56	0.218		4. 誤差	38.900	56	0.694	

Wm					Dm				
変動因	SS	df	MS	F	変動因	SS	df	MS	F
1. 性別	0.144	1	0.144	0.255	1. 性別	0.015	1	0.015	0.067
2. 年齢群	0.474	2	0.237	0.421	2. 年齢群	2.839	2	1.420	6.508**
3. 交互作用	0.254	2	0.127	0.225	3. 交互作用	3.320	2	1.660	7.610*
4. 誤差	31.539	56	0.563		4. 誤差	12.215	56	0.218	

W⁻では、年齢、性間に有意差がみられた。即ち、グループでは、a, b, cの順に、年齢が増すとともに、出現数は少なくなっている。そして、男児より女児の方が少ない。

W_m については、いずれも有意差はみられなかった。

D⁻では、年齢、性ともに有意差があつた。D⁻は、aに多く、b, cには、ほぼ同じほどみられる。これは、未分化な部分知覚が、5才児に多く、6才児になるとそれが減少しはじめることを示している。また、D⁻は、男児が女児よりも多い。これは、先のW⁻の結果とあわせて、男児の方が、女児よりも、より未分化な知覚をしているように考えられるが、しかし、D_m のカテゴリーで、男女間に有意な差がみられなかったので、明らかではない。

D_m では、年齢間に有意差があつたが、男女間では有意差がなく、交互作用に有意差がみられた。つまり、D_m は、年齢とともに多くなるが、その傾向は、男女間で一定していない。

以上、本稿は、幼児のロールシャッハ反応を主として、反応数、反応拒否、把握様式について、5, 6才児の特徴を比較してきてきたが、これは、研究の初歩的段階であつて、ひきつづき、Determinant, Contentに加えて、幼児の反応態度、言語など諸特徴の質的な分析、検討をしていく必要がある。また、今後の問題として、もっと年齢をひろげて発達的にとらえていかねばならない。更に、personalityの発達をみていくのには、継年的、縦断的な研究が必要であろう。また、被検児の人数が少数であつたことも問題としてとりあげ、サンプリングを考慮していきたい。

要 約

幼児におけるロールシャッハ反応の特徴を5, 6才児62名を対象に、主として、反応数、反応拒否、把握様式について比較検討をおこなつた。特に把握様式に関しては、FriedmanのLocationと形態質をともにとらえた16のカテゴリーについて分析した。

結果は次のようにまとめられる。

1) 反応は、5才児が6才児よりも多く、また、男児が女児よりも多い。

これは、5才児の即物的で、こだわりのない反応の仕方と、6才児の慎重で、ていねいな反応態度のちがいによるのではないかと思われる。

カードごとにみても、カードI, IV, Vには、年齢間、性間に差がみられなかったが、あとのカードは、いずれか、または、いずれにも有意な差がみられた。

2) 反応拒否については、年齢と性ともに有意差はなかつた。また、カードIが、もつとも拒否されやすく、colorカードよりもnon-colorカードにRejがあらわれる傾向がみられた。

3) 把握様式においては、D⁻がもつとも多くあらわれ、W⁻, W_m, D_mに、5, 6才児の特徴が顕著にみられた。そして、未分化な部分知覚が5才児に多く、6才児になるとそれが減少しはじめることがわかつた。

なお、Determinantカテゴリー、Contentカテゴリーの形式分析と、反応態度、言語などの諸特徴など質的な検討が、未だ残されている。

更に、今後、年齢の幅を広げて、発達的に比較検討していくことが必要である。

参 考 文 献

- 1) Carlson, R, A Normative Study of Rorschach Responses of Eight-Year-Old Children. *J. Proj. Techn.*, **16**. 1952, 56—65.
- 2) Friedman, H. Perceptual Regression in Schizophrenia. *J. Proj. Techn.*, **17**. 1953 171—185.
- 3) Hershenson, M. Development of the Perception of Form. *Psychol. Bull.* 1967. 326—336.
- 4) 井上和子 児童のロールシャッハ反応——反応単位のあいまいさについて, ロールシャッハ研究IV 1961. 10—27.
- 5) 井上和子 ロールシャッハ・テストの診断性の研究——親子関係診断の場合, ロールシャッハ研究V 1962. 1—8
- 6) 板谷美代子 幼児に施行したロールシャッハ・テスト——固執反応について, ロールシャッハ研究VI. 1963. 68—84.
- 7) 岩原信九郎 教育と心理のための推計学 日本文化科学社 1965.
- 8) 片口安史 心理診断法詳説. 牧書店. 1960.
- 9) 長坂五朗他 ロールシャッハ・テストII 中山書店 1958.
- 10) Meyer, G. & Thompson, J. The Performance of Kindergarten Children on the Rorschach Test : A Normative Study. *J. Proj. Techn.*, **16**. 1952. 86—111.
- 11) 小沢牧子 子どものロールシャッハ反応 日本文化科学社 1970.
- 12) Rorschach, H., Psychodiagnostik. Hans Huber, 1921. (東京ロールシャッハ研究会訳「精神診断学」牧書店)
- 13) Thetford, W. N. et al. Development Aspects of Personality Structure in Normal Children. *J. Proj. Techn.*, **15**. 1951, 58—78.
- 14) 高橋雅春 ロールシャッハ解釈法 牧書店 1964.
- 15) 辻悟他 児童の反応「ロールシャッハ・テストI」・中山書店 1958 271—348